

医学を含む科学の進歩や、情報化、国際化などをはじめとする近年の社会情勢全般にわたるさまざまな変化は、保健・医療・福祉の在り方や個々の分野における施策や研究動向、また、障害者を取り巻く環境やリハビリテーション関連諸分野にもいろいろな影響をもたらしている。今回の特集はリハビリテーション領域における近年のトピックスや、エポックメイキングなできごとを題材として取り上げた。

■脳の 10 年とリハビリテーション

過去 10 数年で神経系の基礎科学をはじめとする脳科学は飛躍的に発展した。この神経科学の進歩は、現在まで、まだ十分にリハビリテーション医療技術の進歩には反映していないが、リハビリテーション医学の学問体系は明確になってきた。その代表的なものとして磁気刺激法による研究成果を中心に解説されている。磁気刺激法によって運動・感覚機能のみならず認知機能や精神活動、情動などの制御に関する中枢神経系のメカニズムについても多くのことがわかってきている。（眞野行生氏，7 頁）

■運動器の 10 年とリハビリテーション

高齢化社会の進行に伴って運動機能低下をもたらす骨・関節疾患が注目され、「運動器の 10 年」が WHO でも取り上げられて以来、世界的なキャンペーンが行われている。骨・関節疾患を制圧する研究、運動機能障害の予防や改善に向けての研究に大きな発展が期待される。特に重点がおかれるのは骨粗鬆症、（関節リウマチを含む）関節疾患、（脊柱管狭窄症などの）脊椎疾患、四肢の重度外傷などに対する再生医学および小児の運動器疾患である。（上好昭孝氏，13 頁）

■リハビリテーション関連施策

リハビリテーション施策を、① 職業的自立を目的とするもの、② 社会的自立支援を目的とするもの、③ 機会均等化と協調した施策、④ 権利に配慮した施策、および⑤ 地域における施策に分け、それぞれの経過を解説している。これまでの 10 年を振り返ってみると①、②、⑤については発展してきたが、③と④については未発達である。今後は特にコンピュータ技術や情報技術の進歩を応用してさらに①、②、⑤を発展させるとともに、③と④に関する施策の研究に力を注いでいくことが求められる。（寺島 彰氏，19 頁）

■障害者運動からみた「アジア太平洋障害者の十年」の評価

「アジア太平洋障害者の十年」は、「国連障害者の十年」を受けたアジア太平洋地域独自の活動として 1992 年に採択され、多くの成果をあげてきた。そのなかで、アクセス（環境のバリアフリー）、障害児教育、障害者の雇用およびリハビリテーション（特に CBR）の各分野における活動実績などが紹介されている。2003 年からは「第二次アジア太平洋障害者の十年」が始まり、さらなる障害者運動の高まりが期待される。（中西由起子氏，25 頁）

■リハビリテーションにおける諸分野の連携

著者は、「当事者の参加、自己判断・自己決定を基にしたより広範囲の機関・人々との連携の成否が今後のリハビリテーションの成否の鍵を握る時代に入った」と述べ、「連携に強い人材の育成」を模索している。リハビリテーションにおける連携の形態や領域、連携を阻む要因と連携を円滑にするポイント、よりよい連携の実践、教育研究のための今後の課題や展望などが解説されている。（寺山久美子氏，31 頁）